
Under Domain

綾部 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

U n d e r D o m a i n

【Nコード】

N 2 7 1 7 N

【作者名】

綾部 滯

【あらすじ】

神坂智樹は二年前から、とあるバイトをしていた。

とはいっても、普通一般的なアルバイトとは一線を駕すもので、『よろず引き受け業』と呼ばれるものだ。

同業者の中ではアンダーと呼ばれているこの仕事を、一言で表現するならば、私立探偵に似て非なるものだった。探偵と決定的に違うところは、アンダーは非合法 例えば窃盗であったり、殺人であったり、そんな依頼であったとしても、成功報酬次第ではそれを受けるとい事だ。

智樹がそんな『裏』の仕事に手を染めたきつかけは、同じくアンダーだった父親の死だった。十年ほど前に死んだ父親は、何者かに殺されたのだ。その真相を知るために、智樹は自らもその道を選んだのだが、それは想像した以上に危険なものだった。

0 ,

今年は冷夏だと、誰が言ったのか。

日はとうに沈んだと言うのに、纏わりつく空気は、まだまだ暑かった。

日が沈んだからと言っても、アスファルトでコーティングされたこのあたりでは、気温が下がる事など考えられない。吹き抜けるビル風は、熱風と言っても差し支えなかった。

じんわりと浮かんだ汗を拭った神坂智樹は、大きなビルに挟まれるような形で建っている、四階建ての雑居ビルを見上げた。

最近、このあたりのビルは、軒並み建替えをした。おかげで、周りには最近流行りのブランドショップが入るビルばかりが立ち並んでいる。

例に漏れずこのビルにも、ちゃんと立ち退き、もしくは建替えの話は来たのだ。だが、このビルのオーナーであり、智樹の育ての親でもある、高槻昂^{たかつきこう}は首を縦に振らず、現在に至っている。

「ったく。こんな一等地にいる意味なんかねーんだから、売っちゃまえば良かったのに」

ぶちつと言った智樹は、重い足を引きずるようにして、階段を上り始めた。

地方都市とはいえ、一応、政令指定都市の中心部だ。交通の便は悪くないし、仕事をするのなら、都合のよい場所だ。けれど、老朽化したビルは、お世辞にも綺麗とは言い難かった。

まわりのビルが建て替えをするまでは、それなりに味があると思

えなくもなかったのだが、真新しいビルにはさまれた、その姿を見ると物悲しくなるのだ。

それに。仮にも、コンサルタント業を営むのなら、もう少し、小奇麗な事務所を構えればよいと智樹は思うのだ。だが、コンサルタントは営業職だと言って憚らない昂は、どうせ、事務所になどクライアントは来ないのだから、事務所が小奇麗である必要はないと言

う。
まあ、正論は正論なのだろう。だが、古いビルはとにかく暑いのだ。付いているクーラーが旧式のものだとか、そういうレベルではなく、昔の建物は、暑さを凌げるようには出来ていないのだと思う。そう。

問題なのは、場所でも、ビルが古いことでもなく、ココが暑い事だ。

建築材料の問題なのか、設計の問題なのか。専門ではないから、詳しいことは分からないが、今年変えた新しいクーラーの効きも悪いのだから、クーラーの所為だけではないと言う事が証明されてしまった。

致命的なことに、このビルにはエレベータがない。そして、当然の事ながら、廊下及び階段にクーラーはついていない。そんなわけで、最上階の事務所まで、階段で上がっていく間に汗だくになってしまうのだ。

ようやく最上階まで登った智樹は、目の前の『高槻経営コンサルタント』と書かれたプレートを見やり、深い溜息をついた。そして、立て付けの悪いドアをノックもなしに開けた。

冷たい空気が、ふわりつと智樹の頬を撫でた。いくら効きが悪いと言っても、外から入って来た時ぐらいは、冷房の役目を果たすらしい。

ほっと息をついた智樹は、ついつと昂のデスクに視線を向けた。

丁度電話を取っていたらしい昂は、ちらりつと智樹に視線を向けると、すつと背中を向けた。

仕事中 か。

手の甲で汗を拭いた智樹は、体裁程度に置かれた応接セットに足を向けた。そして、ソファアームにどかりと腰をおろすと、机の上に置いてあった新聞に手を伸ばす。

TVの番組表にざっと目を通した智樹は、ばさりつと音を立ててそれを広げると、経済面に目を落とした。他は見なくても、経済面ぐらいは目を通しておけというのが、昂の持論で、両親を亡くし、昂に引き取られた十歳の時から、智樹はこうして新聞を読んでいる。いや、最初のうちは、読まされていた、というのが正しいのかもしれない。

何しろ、十の子供なのだ。そんなものを読んだ所で、大半は意味が分からない。それどころか、読めない漢字までゴロゴロとあつて、その読み方や意味を聞くものなら、昂はにつこりと笑みを浮かべながら智樹の前に辞書をドンっと積み上げるのだ。そして、それでも分からなければ聞きにこい、という。

そんな事を都合十年も繰り返していれば、自ずとそれに派生した知識も増える。お陰で、経済の動向には愚鈍ではなくなつたし、とりあえず、無駄にはなっていないらしいので、文句を言うつもりはない。それでも、昂が智樹にこんな事をさせた理由を聞いた時には、聞かなければよかつた、と本気で思った。

その理由というのは『一緒に住む人間が、それなりの経済の知識を持つていなければ、仕事の相談が出来ないじゃないか』だった。そんな役割を、子供に求めるな。そう思いはしたが、発想を変えれば、昂は最初から智樹を『子供』ではなく一人の『大人』として扱ってくれていたのだとも考えられるわけ。実際に、そんな相談を持ちかけられたことは、今だかつて一度もないから、多分、本気で言っていたわけでもないのだろう。

今現在の裏稼業を考えるなら、いろんな意味で役には立っている

から、昂はこうなる事も見越していたのかもしれないとも思う。

だから、昂には、いつまでたつても頭が上がらない。

そんな事を思いながら、ちらりつと昂の方に視線を向けた。まだ、電話は終わらないようで、こちらに背を向けたままだった。

いつものように、主要な記事だけを斜め読みして、ざつと株価をチエックした後、ようやくたどり着いた三面記事に目を向けた。やれ、放火だ交通事故だという記事の中に、個人宅から絵画が盗まれたと言う記事が並んでいるのが見えて、智樹はすつと眉を寄せた。そこに書かれていた名前には、とても見覚えがあった。

丁度その時、電話が終わつたらしい昂が受話器を置いたのが見えて、智樹はすくりつと立ち上がると、昂のデスクの上に新聞を投げ捨てた。

「どういう事だよっ！ これはっ！」

叫んだ智樹を一瞥した昂は、智樹が投げ捨てた新聞を見ようとせず、「どうかしたのか？」と返した。

「どうかしたのか、じゃねーよ！」

昂は、毎朝、事務所にある新聞をすみからすみまで読み尽くす。そんな昂が、記事を読んでいないはずがないではないか。ずんずんつと昂のデスクに歩みよつた智樹は、一旦投げ捨てた新聞をむずつと掴むと、嫌でも目に入るように昂の目の前で広げた。

「昂だつて、これ見たんだろ？」

ようやく新聞に視線を向けた昂は、めんどくさそうに口を開いた。「ああ、それが。それが、どうかしたか？」

「どうかしたか、じゃないだろ。これで、二度目だぜ？ 一体どうなってるんだよ。何で、狙ってたターゲットが、連続で盗まれるんだ？ ありえないだろ」

「さあな。偶然だろ」

「そっかー。偶然かあ。珍しい事もあるもんだなあ。つて、偶然のわけねーだろ！ 中途半端な仕事すんなよ情報屋！」

新聞をバシツと机に投げ捨てながら言った智樹に、昂はにっこり

と笑いながら口を開いた。

「ずいぶん、生意気な口を利くようになったよねえ。智樹くん？」

言った昂は、口もとに笑みを貼り付けたまま、智樹のほっぺたを左右に引っ張った。

「いてー！ いてーよ、昂」

「口は災いの元って言うだろ。この仕事を続けたいなら、もう少し、思慮深くなりなさい」

「分かった。分かったから、放せよ」

「放してください、だろ」

言いながら、更に強く引っ張ろうとした昂に、智樹は慌てて口を開いた。

「わーっ！ 放してくださいー！」

あっさりと降参した智樹に、昂は面白くないというように「なんだ。堪え性のない」と呟いた。そして、ふっつと溜息をつくど、仕方なさそうにその手を放した。

解放された智樹は、もう一度捕まっては大変とばかりに、ざざつと昂から離れた。

鏡があるわけではないから確認は出来ないが、きつと両頬は赤くなっているだろう。ひりひりと痛む頬をさすりながら、智樹は深い溜息をついた。そして、ちらりつと昂を見やると、件の記事を睨めつけていた。

その表情は、いつになく深刻そうに見えた。

まさか、先程の智樹の言葉を気にしているのだろうか。

いや。昂は、そんなに繊細な神経の持ち主ではない。そう思いながらも、なんとなく気になって、智樹は昂の顔を覗き込むようにながら口を開いた。

「ってか、マジで偶然だと思ってるわけ？」

そんな智樹の言葉に、昂はついつと視線を上げると短く言った。

「まさか」

「……」

実にあっさりとした、昂の言葉に智樹はがしがしつと頭を掻いた。昂が、こういう人間だということは、長い付き合いで十分承知しているはずなのに、どうしていつもいつも、引っかかってしまうのか。

再度、深い溜息をついた智樹をちらりと見やった昂は、首を傾げながら「どうかしたのか?」と言った。

「……なんでもねえよ。で? 偶然じゃないなら、なんだっていうんだ?」

「偶然じゃないなら、故意、だろ」

「 故意?」

「依頼人が複数のコネクタに仕事を依頼していた、ってトコだろうな」

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべながら言った昂に、智樹はすっつと眉を寄せた。

U n d e r D o m a i n 0 - 1 (後書き)

続きます。

まだまだプロログですが、よろしくお願ひします。 > | | (<

智樹は二年前から、とあるバイトをしていた。

とはいっても、普通一般的なアルバイトとは一線を駕すもので、『よろず引き受け業』と呼ばれるものだった。

同業者の中ではアンダーと呼ばれているこの仕事を、一言で表現するならば、私立探偵に似て非なるもの、だろうか。探偵と決定的に違うところは、アンダーは非合法　例えば窃盗であったり、殺人であったり、そんな依頼であったとしても、成功報酬次第ではそれを受けるといふ事だ。

何でもありなだけに、探偵社では受けられないような仕事ばかりが、アンダーのもとに集まることになるわけで。その仕事の殆どが、非合法であることは否めなかった。

アンダーに仕事を頼みたい依頼人は、アンダーとつながりのあるコネクタと呼ばれる情報屋と渡りをつけ、それ相応の対価を払って仕事を依頼する。だが、世に数多とある探偵社と違って、アンダーは表立って仕事を受けているわけではないし、コネクタとコンタクトを取ること自体がそう簡単な事ではない。

それなのに、この依頼人はわざわざ、複数のコネクタに依頼をした、というのだろうか。

何か、腑に落ちなかった。

「複数のコネクタに依頼するって、そんなの、ありなのか？」

「依頼していけないというルールはないが、まあ、普通はしないだろうな。たとえ相手が訴えられない事が分かっているとしても、事は犯罪なわけだし。秘密は、最小限に留めておいた方がいい。コネクタだって、そう簡単に繋ぎが取れるわけじゃないしな」

「だよなあ。俺なんか、昂しかコネクタは知らないし」

「知る必要もないよ」

さらりつと言った昂に、智樹は小さく肩を竦めながら、もう一度ソファに腰をおろした。

この仕事は、リスキーなものであるという事は、智樹も自覚している。

そして、コネクタである昂が、智樹に渡す仕事がある程度選んでくれているというのも、十分理解している。だから、他のコネクタから依頼を受けようとか、そういうつもりは全くないのだから、興味がないといえば嘘になる。

そんな思いを振り払うように、ぶんぶんっと頭を振った智樹に、昂は首をかしげながら言った。

「どうかしたのか？」

「あ いや。なんでもねえよ。それよりさあ。昂、今回のヤマは、絶対に表沙汰にならないって言ってなかったか？」

「本来ならな」

「なら、何で新聞沙汰になってるんだ？」

今回、智樹が受けた依頼は、とある資産家の家から、絵画を一枚盗んでくると言うものだった。もともと盗品で裏のルートで手に入れた絵だったから、盗まれたとしても、闇から闇へ葬り去られる事件であって、表沙汰にはならないはずだったのだ。当然、新聞になど載るはずもない。それなのに、それが、こうして堂々と新聞記事になってる。

「さつき確認をとったよ。奥さんは盗まれたものが、公表できないものだったと言うことを、知らなかったらしくてね」

「で、警察に通報しちまったってか。その奥さん、ホントに知らなかったのか？」

「ああ。まあ、そういう世界に足を突っ込んでるのは、旦那のほうだけだからな。奥さんはしらなくて当然さ」

「で、どうしたんだ？」

「旦那が、慌ててもみ消したらしいよ。被害届が取り下げられれば、警察はそれ以上、動かない。まあ、新聞までは止められなかったみ

ただいけど、『絵画』が盗まれた、程度の書き方だから、それほど問題は無いだろうな」

「ふうん」

要するに、このまま有耶無耶と言うことだろう。

「そういえば、前回の時も、新聞報道されてたよなあ。あれも、表には出ないって言ったのに」

言いながら、ちらりつと昂を見やると、昂は小さく肩を竦めた。

「前回は、運が悪かったんだよ。何しろ、隣家の住人が警察関係者だっただろ？　そういう意味では、君が関わらなくて良かったんじゃないか？　下手したら、捕まってたかもしれないよ？」

「ふん。そんなへマするかよ。つーか、警察関係者とか関係ないだろ？　あれだけ、派手に家捜しすれば、気付かれるのは当然だ」

「けど、結果的に、これで二回連続、出し抜かれた事になる」

そんな昂の言葉に、智樹はぐつと押し黙った。

そう。新聞の報道など、どうでもいい。問題は、そこなのだ。

智樹が受けていたはずの依頼のターゲットが、仕事をする前に掻き攫われたのだ。それも、これで二度目だ。

「多分、依頼があった時期は同じはずなのにねえ」

意地の悪い笑みを浮かべながら言った昂に、智樹はふんつと鼻を鳴らした。

「うるせえなつ。出し抜かれたとか言うけどなあ。依頼がかぶってたなんて話は、俺は聞いてねーぞ」

噛み付かんばかりの勢いで言った智樹に、昂はあっさりと言った。

「そうだろうな。俺も知らなかったし」

「知らなかったとか言ってる場合かよ、情報屋が！」

言った智樹に、昂はふんつと鼻を鳴らすと、椅子にふんぞり返った。そして、全く悪びれる事なく言った。

「仕方ないだろ？　俺も、まさか、ぶつけられてとは思わなかったんだから」

「じゃあ、何だと思ってたんだよ」

納得がいかない、というように食い下がった智樹をちらりつと見やった昂は、少し考えた後、「潰し」と短く言った。

「潰し？」

「ああ、智樹は知らないか。たまにいますんだよ。特定のアンダーの仕事を、片っ端から潰して楽しむバカがさ」

「なんだ、それ。そんな事してどうするんだ？」

わからないと言うように首を傾げた智樹に、昂はくすりつと笑い声を漏らした。その声が妙に癪に障って、智樹は口を尖らせながら言った。

「んだよ。なんか文句あるのか？」

「文句はないよ」

「ならなんだよ」

「いや。こんな仕事してるのに、智樹は健全だなあと思ってたさ」

「昂。もしかして、俺の事、馬鹿にしてないか？」

「馬鹿になんてしてないよ。羨ましいなあと思っただけだ」

言いながら、椅子から立ち上がった昂は、智樹のもとまで歩み寄ると、智樹の髪をぐしゃぐしゃつとかき混ぜた。まるで、子供扱いされているようで、面白くない。その手を振り払いながら、智樹は抗議の声を上げた。

「なにすんだよっ！」

「でかくなつたなあ。ホントに」

「当たり前だろ。来年には、二十歳だ」

「そうか。もう、そんなになるんだよなあ」

しみじみと言いながら、さらに、髪をぐしゃぐしゃつとかき混ぜた昂の腕を、がしつと掴んだ智樹は、きつと昂を睨めつけながら言った。

「バカな事やってねーで、さっきの続きを話せよ」

「続きって？」

「だから、潰してどうするってヤツだよ」

せかすように言った智樹に、昂は仕方なさそうに息をつくつと、智

樹の前にどかりと腰をおろした。そして、少し考えた後ゆっくりと口を開いた。

「この商売、大事なのは何だと思う？」

「何って、依頼の完全遂行と、秘密厳守じゃねーの？」

「そうだ」

こくりと頷いた昂は、智樹を真っ直ぐに見据えると続けた。

「もともと、非合法的な依頼が殆どのこの仕事だ。成功率は100%でなければ、話にならない。悪くしても90。それが限度だ」

「まあ、そうだろうな」

「だが、今回のように、表沙汰になってしまったり、依頼自体を遂行できなかったりしたら」

「アンダーとしての信用が、なくなる？」

「ああ。当然、コネクタの信用も、な。だから、失敗を繰り返すアンダーに、仕事は回せない。いや、回さない」

そう言い切った昂の顔が、とても冷酷に見えて、智樹はごくりと生唾を飲み込んだ。それをいうなら、自分はこれで、二回連続で失敗したことになる。今まで、全く失敗をした事がないとは言われない。けれど、昂がこんなことを言ったのは初めてだった。

もしかしたら、もう仕事を回さないつもりなのだろうか。

そんな思いが頭を擡げた。

きゅつと唇を噛んで、黙ってしまった智樹に、昂は首を傾げながら言った。

「どうした？ いきなり黙り込んで」

「……あの、さ。昂」

「聞きたい事は、ただ一つ。」

もう、智樹に仕事をさせないつもりなのか、という事だけだ。それなのに、たったそれだけの言葉が、口から出てこない。

「なんだ？」

続きを促すように言った昂に、智樹はちらりつと昂をみやると、意を決したように口を開いた。

「もう、俺には仕事回さないとか、いわねーよな？」

「は？ いきなり何を言い出したんだ？」

「だって、失敗を繰り返すアンダーに仕事は回せないって言っただろ」

昂の顔色を窺いながら、心配そうに言った。

そんな智樹をマジマジと見やった昂は、次の瞬間、ぷつと吹き出した。そして、そのまま、腹を抱えて笑い出した。

こちらは、真剣に心配していると言うのに、何故、笑われなければならぬのか。

「なんだよっ！ 何で笑うんだ？」

「バカだなあ。そんな事、心配したのか？」

笑いつづけながら言った昂に、智樹はむつとしながら抗議の声を上げた。

「だから、なんで、バカとか言われなきゃいけないんだよっ」

「あー。悪い、悪い。智樹があまりにも可愛いコト言うからさ」

言いながら笑い続ける昂に、智樹はあからさまに、不機嫌だとい

う表情を浮かべながらブチツと呟いた。

「気色悪いこと言うなよっ！　ってか、説明になつてねーしっ」

「そういう反応をするから、可愛いとか言われるんだよ」

「　昂」

ぎつと睨めつけた智樹に、昂はもう言わないというように、両の手を上げると口を開いた。

「大丈夫だよ。多分、今回に関しては、君のミスは、ミスのうちに入らないから」

「どういうことだ？」

「言っただろ？　ぶつけられてたって」

「わけわかんねえよ」

「その頭はお飾りかい？　少しは想像力を働かせないと、この仕事はやっていけないよ」

諭すような、それでいて、からかうような。そんな口調で言った昂に、智樹は口を尖らせながら「分からないもんは、どうやったって、分からないだろ」と言った。

そんな智樹を見やり、小さく息をついた昂は仕方なさそうに口を開いた。

「　だから。依頼をぶつけられてた事を見抜けなかった、僕の責任だと言つてつてるんだよ」

よほど言つたくなかったのだろう。昂は、苦虫を噛み潰したような表情で、吐き捨てるように言った。

不味い所をつついたのかもしれない。

ぼんやりとそんな事を思った智樹は、息を殺して昂の次の言葉を待った。そんな智樹をちらりっと見やった昂は、くしゃりっと前髪を掻き上げると、深い溜息をつきながら続けた。

「確かにさ。おかしいとは思っていたんだよね」

「何がだ？」

「智樹は、まだ、ツブシを掛けられるような、アンダーじゃない」「なんだよそれはっ」

半人前だと言われたようで、思わずむっとしながら言った智樹に、
昂は口もとに薄く笑みを浮かべながら言った。

「不服かい？」

言った昂の表情は、先程までとは違って変わって、なんとも意地の悪いものだった。「ううっ」とくぐもった声を上げた智樹に、昂は再度溜息をつくど、べったりとソファに背中を預けた。

「もつとも、こんな簡単な依頼を潰したところで、君の評価が左右されるわけじゃないけどね」

「そういうもんなのか？」

「誰でも出来る依頼を潰しても、あまり意味はないだろう？ それこそ、そこまでして、仕事を横取りしたいのか、と言われるのがオチだからね。どうせ、潰しをするのなら、大きなヤマじゃなきゃ、意味がないという事だよ」

「ふうん」

潰しを掛けられるくらいのアンダーというのは、どのくらいの力を持っているのだろうか。自分以外のアンダーを智樹は、一人しか知らない。彼の仕事をよく知っているわけではないけれど、きつと彼は、それぐらいの能力を持ったアンダーだったのだろうと思う。

「なに？ 落ち込んでるわけ？」

突然黙り込んだ智樹を覗き込むようにしながら、昂が言った。

小さく息をついた智樹は、ついつと天井を見上げながら口を開いた。

「そんなんじゃないよ。失敗したって言っても、ヤマに手をつけて失敗したわけじゃないしさ。前金は貰ってるわけだし？ 別に、関係ないよ」

「でも、気になってはいるんだろ？」

「まあ な」

気にならないと言えば嘘になる。

依頼の時期は同じだと、昂は言った。要するに、スタートは同じだったはずだ。それなのに、こちらが下調べをしようとしている間

に、依頼を遂行されたということは、智樹よりも仕事が速いアンダーなのだ。

「立て続けだしな。誰かが、裏で糸でも引いてるかもしれないな」
「裏って、一体どういうことだ？」

智樹がそう問い返した時、昂のデスクの上で携帯が鳴った。

すくりつと立ち上がった昂は、そちらに足を向けると、携帯を取り上げた。そして、発信者名を確認すると、すうつと目を細めて着信ボタンを押した。

「もしもし」

短く言った昂は、ちらりつと智樹を見やった後、くると背を向けた。時折頷く程度で、電話の相手の言葉に耳を傾けていた昂は「分かった」と言うと、通話を切った。

「今度の件。絵は、依頼主のもとに届いているそうだ」

言いながら、ソファアにどかりと腰をかけた昂に、智樹は目を大きく見開いた。

「って事は」

「これで、潰しの可能性は、完全に消えたな」

そんな昂の言葉に、智樹は小さく首を傾げた。

今回の依頼は、それで解決しているのかもしれない。だが、その前の依頼の顛末を、そういえば智樹は聞いていない。けれど、この話の流れを鑑みるに、その前の依頼も、実は既に片がついているのではないだろうか。

「……なあ。もしかして、前回の分も、片はついてるのか？」

「ああ、智樹には言ってなかったな。ネガは依頼主の手に渡っているそうだ」

「そう　なのか」

仕事が進んでできなかったのだから、それ以上の情報を智樹に知らせる義務は、昂にはない。ないのだけれど、何も言ってもらえなかったという事実は、やはり自分は半人前なのだと、否応なしに自覚させられた。

小さく息をついた智樹は、すつと頭を切り替えると、昂を真つ直ぐに見やると口を開いた。

「じゃあ、多分じゃなくて、確実に、ぶつけてるって事なんだな」

「お、少しは考えるようになったな」

にやりつと笑いながら言った昂に、智樹はがっくりと頭をたれた。

「昂……。俺の事、ホントに、馬鹿だと思ってないか？」

「まさか。僕は、馬鹿の相手をするほど暇じゃないよ」

同意しても良いのか、よく分からない事を言った昂に、智樹は再度溜息をついた。

昂に引き取られてから、もう約十年になるが、未だに、昂の思考パターンは読めなかった。もっとも、理解しようなどとも思っていないし、理解できるとも思っていないが。

「なあ」

「どうした？」

「前回と、今回。同じヤツがやったと思うか？」

そんな智樹の言葉に、昂は「そうだなあ」と言いながら、黙り込んだ。そして、少し考えてからゆっくりと口を開いた。

「仕事の速さから言っても、手口から言っても、まあ、同じだと見るのが妥当だろうね」

「手口って、あの二つじゃ、違いすぎないか？」

最初のヤマは、家捜しをしたのではないかと思えるほど、現場が荒れていたと聞いた。だが、今回は、掛かっていた絵が消えてなくなっていただけで、侵入者の痕跡は皆無だったらしい。新聞にかかれていた情報だけだから、実際にどうなのかは分からないが、現場がきれいなものだったというのは、本当だろう。

状況だけを見る限りでは、とてもそれらが同一犯のものだとは思えない。

それなのに、昂は手口が同じだという。

「納得できないって顔をしてるね。だけど、依頼の内容から考えれば、分かるはずだ。最初の依頼は、なんだった？」

「強請りのネタになつてるネガを、回収してくれって事だろ？」
言った智樹に、昂はこくりと頷いた。

「ターゲットは、かなり悪質な強請りをいくつもやってたらしいからね。ネガを取り返すだけだと、下手をすれば依頼人に危害が及ぶ可能性があつたんじゃないか？」

「だから、わざと、派手にやって、警察沙汰にしたっていいのか？」

「まあ、僕がそう勝手に想像しただけの事だけどね。でも、あのターゲット、恐喝の容疑で昨日逮捕されたようだからね」

「……」

そんなニュースは知らなかった。新聞には出ていなかったと思うし、TVでも流れていなかったような気がするのだが。

「ニュースソースは、一体どこだよ」

「そんな事、言えるわけがないだろ。情報屋の命なんだから」

「ふん、よく言うよ。ぶつけられた事にも気がつかなかったのに」
そんな智樹の言葉に、昂は肩を竦めながら「それは、もう謝つただろ」と言った。そして、深い溜息をつくると天井をひっきりと見上げた。

「なんにしても、これからは、もう少しネタの出所を吟味しないとね。この二回は、智樹が手を出す前に片付けられちゃってたからな。現場で鉢合わせなんて事には、ならなかったから良かったけど」

「現場でのバッテリーング か」

そんな事態を今まで想定したことは無かった。無かったけれど、現場で同じ目的をもつもの同士が鉢合わせたとしたら、一体どうなるのだろうか。あまり、良い事が起こるようには思えなかった。

そんな事を考えていると、昂が些か難しい表情を浮かべながら、すくりと立ち上がると、自分のデスクに足を向けた。そして、椅子に深く腰掛けると「少し暑いな」と言いながら、クーラーの設定温度を一度下げた。ぶうんつと、室外機が唸る音が聞こえて、風が少し冷たくなった。

今更、設定温度を下げなければいけないような室温ではないのだ

が。そんな事を思いながら、ちらりと昂を見やった。

もともと、昂はそれほど暑がりではない。

なのに、何故、わざわざ設定温度を下げなければならなかったのか。それは、昂が、必要以上に緊張しているからではなかるうか。今の流れで、昂が気をもむようなことといえば。

「もしかして、次の仕事、来てるのか？」

ボソリツと言った智樹に、昂がギョツとしたように智樹を見やった。まさか、智樹が気がつくとは思っても見なかった、そんな表情だった。そのまま黙り込んでしまった昂を、訝しげに見やった智樹は、その名を呼んだ。

「昂？」

智樹のその声に、はっと我に返った昂は、苦い笑みを浮かべた。

なんでもない、と誤魔化すには、最初の対応を失敗したという感じだった。深い溜息をついた昂は、しぶしぶ口を開いた。

「珍しく、鋭いね」

「ふん。俺はいつでも、鋭いだろ。で？　どんな依頼なんだ？」

すくりと立ち上がって言った智樹に、昂は机の中から一枚の紙を取り出すと、それを智樹に手渡した。

この事務所の報告書に模して書かれたそれは、一見しただけでは、ただ単に、相談内容が書かれているだけの報告書にしか見えなかった。

それを、しばらくじっと眺めていた智樹は、ぺろりと下唇をなめながら口を開いた。

「研究所から、データを盗み出す？」

「ああ」

「産業スパイかなんかの類か？」

「まあ、端的に言えばな。依頼主曰く、相手が自分の会社から、データを盗んだんだ、と言っていたが、実際のところは不明だ」

「ふうん」

短く言った智樹は、もう一度その用紙に目を向けた。

不明も何も、盗まれたのがデータだと言つのなら、それを取り返すと言つのは、なんとも間抜けな話だ。

なにより、データを盗もうとしている人間が、わざわざその言い訳をするのは、見苦しいと思う。というよりも、本当に、データを盗まれたと言つのなら、相手の手に渡ってしまった時点で、もう手遅れなのではないだろうか。

「なんか最近、盗みばかりなんだな」

「それが、一番面倒が無いんだろ？」

あっさりと言つた昂に、智樹はすうつと目を細めた。そして、少し考えた後「ああ」と短く言った。

「バツティングさせるのに、丁度いいのか」

「そうということ」

そんな昂の言葉に、智樹はゆっくりと昂のデスクに歩み寄ると、床に置いてあつたシュレッダーに、手にしていたその紙を入れた。

ガガガツと音を立てて、紙が無数の細かい刃に飲みこまれた。

「今日あたり、行つてみるのか？」

「ああ。仕掛けてみないと、わかんねーし」

言つた智樹は、ちらりと腕時計に視線を向けた。

もう七時を回つた。今日中に仕事を片付けるつもりならば、早めに手を打たなくてはいけない。

小さく息をついた智樹は、くるりと踵を返すとドアに足を向けた。

「ああ、智樹」

と、背後から昂のそんな声が飛んで、智樹はゆっくりとそちらに視線を向けた。丁度、その視線の先に、カレンダーがみえて、智樹はすうつと目を細めた。

盆と土日以外は、びっしりと仕事のスケジュールが書かれたそのカレンダーに、一日だけ、何もかかれていない日があつた。

八月五日。

その日だけは、ぽっかりと、取り残されたようになるの予定も入っていない。

何かから目をそむけるように、くるりとドアに向き直った智樹は、ぎゅっとその手を握りこんだ。そして、低く言った。

「分かってるよ。明日だろ？」

「覚えてるならいいよ」

言った昂に、智樹はさらにその手を強く握り締めた。

「誰が、忘れるかよ」

まるで、搾り出すように言った智樹は、静かに扉を閉めると、そのまま部屋を出て行った。

閉まった扉の向こうに、智樹の背中を見ながら、昂は深いため息をついた。

八月五日は、智樹の両親の命日だった。

そして、それは、昂がかかけがえの無い親友を失った日でもあった。

あの日も、とても、暑かった。

今でも、あの日のことは、まるで昨日の出来事のように、思い出すことが出来る。

当然、忘れられるはずが無い。

忘れられるはずも無い。

それでも。

「君の場合は、忘れた方が良かったのかもしれないね」

ポツリとつぶやいた昂の言葉は、当然、智樹の元には届くことは無かった。

「なんだかなあ……」

社員が退社するのを待つて、社屋に忍び込んだ智樹は、がしがしと頭を掻いきながら呟いた。

研究室からデータを盗んでくるといふ依頼だといふから、それなりに厳重なセキュリティを想像していたのだ。それも、話を聞く限りでは、他社から盗んだデータを保管しているといふぐらいだからだが、そんな緊張感など、ふっ飛ばしてしまうほど、お粗末なものだった。

今日日の企業は、全員が退社したと同時に、若しくは、契約した時間に警備会社のセキュリティシステムに切り替える事が多い。そして、人の出入りがあった場合、即座に通報されるようになっていく。だが、この研究室には、そういうものが一切見られなかったのだ。セキュリティを黙らせる手間が必要なかった分、確かに、楽ではあった。あったのだが、はつきりいつて気が抜けた。それは、セキュリティだけの問題でもなかった。パソコンにしても、IDやパスワードの入力さえ、要求されなかった。

「普通、研究機関って、もつとセキュリティ厳しいもんじゃねーのか？」

ターゲットのパソコンを立ち上げた智樹は、その中身を確認しな

がら、溜息混じりに言った。

簡単すぎれば、簡単すぎるほど、どこかに落とし穴があるのではないかと、疑いたくなる。それこそ、こうして盗みにくる事が分かっている、わざとダミーデータでも掴ませようとしているのかと、勘ぐりたくなる展開だ。

「まさか、もう、例の奴にやられた後とか、いわねーよな」

ボソリツと呟いた智樹はぐるりとあたりを見回した。

セキュリティシステムが作動していないと言うことは、逆にいえば、中に誰かが潜んでいたとしても、わからないと言うことだ。けれど、とりあえず、ここまでそんな人の気配はなかったし、このパソコンにしても、弄られている形跡は見当たらなかった。

「まあ、とりあえず、仕事すっか」

小さく息をついた智樹は、逸れかけた気を目の前のターゲットに戻した。

時間を気にしながら、目的のデータを探す作業を続けた智樹は、ようやくそれを見つけると、データをメモリスティックに抜き取った。そして、それが終わった後、もう一つのメモリスティックを差し込んで、ファイルを一つコピーすると、シャットダウンした。

メモリスティックをポケットにねじ込んだ智樹は、ちらりとデスクに視線を向けると、引き出しに手を掛けた。さすがに、ここは鍵が掛かっていた。

足下に仕込んであった針金を取り出した智樹は、簡単にそれを外すと、引出しを開けた。そして、整然と並べられたファイルを見ると、実験データの紙ベースの書類がいくつかあった。

少し考えた智樹は、その書類と全く関係のない書類とをいくつか取り出して、引出しを閉めた。そして、もう一段下の引出しを確認する。

太目のファイルを取り出した智樹は、それを開いた。そこには、かなりの量のCD-ROMが挟み込まれていた。先程のパソコンがミラーリングされていた形跡はなかったから、他のHDDやネット

ワークドライブに自動バックアップがあると言うことはまず考えられないだろう。だが、まったく、バックアップデータが取ってない事はないだろうから、ここに入れ込まれている可能性は高い。

うんと、大きく頷いた智樹は、几帳面に書き込まれたROMのタイトルを順番に見て行った。ようやく目的のものを探し当てた智樹は、小さく息をつくとき、そのROMを引っ張り出した。そして、これも、別のROMも一緒に抜き取る。

戦利品を鞆の中に詰め込んだ智樹は、満足そうに言った。
「よっしゃ、終了」

ポータブルのHDDでも使われていた日には、この作業は意味をなさないだろうが、そこまでは自分の仕事ではないはずだ。

机の鍵もしっかり掛けなおした智樹は、すくりと立ち上がると、大きく伸びをした。

そして、ちらりつとドアの方に視線を向けると、すうつと目を細めた。

なにか人の気配を感じたような気がしたのだ。

もしかしたら、件のアンダーだろうか。そんな事を思いながら、慎重にドアまで足を運んだ智樹は、ゆっくりとあけた。そこには誰もいなかった。けれど、絶対に、いまここに誰かがいたのだ。

「逃げ足の速いやつだな」

ふんつと鼻を鳴らしながら言った智樹は、後手で静かにドアを閉めた。

「ま、いいか。とりあえず、今回は俺の勝ちだしな」

にんまりと笑みを浮かべた智樹は、ちらりと時計に目をやった。もうそろそろ、一時になるうとしていた。ここに来たのが、十二時すぎだったから、一時間近く居座っていた事になる。少し時間を掛けすぎたかもしれない。早く戻らなければ、昂が心配するだろう。

そんな事を思った智樹は、足早に通用門に向かった。

外の様子を窺いながら、屋外に出た智樹は、几帳面に鍵をかける。と全ての仕事が終わったというように、ふうつと息をついた。

そして、背中に背負った荷物を確認すると、ぐるりとあたりを見回した。

ふと、木陰のあたりで視線が止まった。

人の気配は感じられなかったが、なんとなく気になったのだ。

少し考えた智樹は、イチかバチか口を開いた。

「お前か？　ここんトコ、俺の獲物を搔っ攫つてくれた、アンダーは」

けれど、返って来たのは静寂だった。

気のせいだったのだろうか。そう思いながらも、納得できなくて、

智樹はじつとそちらを睨めつけた。

と、かさりつと足音がして、黒ずくめの影が姿を現した。

「誰だ？」

張りのある、若い男の声だった。

そんな声に、智樹はごくりつと生唾を飲み込んだ。

気のせいだとは思いついて、声を掛けはしたが、全く人の気配は感じられなかったのだ。多分、この男がだんまりを決め込んだのなら、自分は、この男の存在に気がつかなかったはずだ。

声だけ聞けば、智樹と同じぐらいにも思える。だが、自分で言うのもなんだが、この年齢でこんな仕事に手を染める人間など、そういるはずもない。

すつと、大きく深呼吸した智樹は、その男を見据えながら口を開いた。

「同業者だよ。で、ターゲットはこれだろ？」

言った智樹は、ポケットの中からメモリスティックを取り出すと、男に見せた。ここからでは、暗くて顔までははっきり見えないから、男がどんな表情をしているのかは分からなかった。

ただ、沈黙を返した男は小さく息をつく、否定も肯定もないまま、くるりと踵を返した。

「あっ、おい！　無視すんなよ！」

慌てて、その男を追った智樹は、男の腕をむずつと掴んだ。そん

な智樹に、男はめんどくさそうな表情をしながら振り返った。その顔は、声同様、若かった。それこそ、自分と同じくらいに見える。

驚きを隠せないまま、不躰なまでの視線を向けていた智樹に、男は深い溜息をつきながら口を開いた。

「何か用か？」

その声に、はっと我に返った智樹は、思い出したように口を開いた。

「ちょっと、聞きたいことがあるんだよ」

「それは、今するべきことなのか？」

「へ？」

「時と場所を考えると」

言った男は、智樹の手を振り払うと、すたすたと裏通りに面した塀の方に足を進めた。そんな男に、智樹は口を尖らせながら言った。

「おいっ！ お前なんだろう？ 立て続けに、2回も俺の仕事を邪魔しやがったのは！」

今回は、自分の方が若干早かったようだが、それこそ、今日動かなければ、またしてやられていたはずだ。そう。こちらが、二重契約の可能性に気がついて、早く動いたから。

今、この男がここにいると言うことは、この男のところにも、この依頼が入っていたと言う事だ。それなのに、この仕事を盗ったはずの智樹の事など、全く関心がないと言うように歩いていく。

「おいっ！ 無視すんなよっ！」

今度のヤマは、自分が勝ち取った筈なのに、何故か自分が負けたような気分だった。何故、自分がこんな気分にならなければいけないのか。思わず叫んだ智樹を、男はうんざりとしたように見やると言った。

「捕まりたいなら、勝手にしろ。もう直ぐ、警察が来るぞ」

「なんだって？」

予想もしていなかった言葉に、智樹はぎょっとしたように、表通りに視線を向けた。この男が、裏へ向かうと言うことは、もしかし

たら、もう表には警察がいるかもしれないということだろうか。

「どうして、そんな」

「タレコミってヤツだろ」

わかりきっていることを聞くな、と言うように言った男は、止めてしまった足を、再度進めた。

これは、どうとつたらいいのだろうか。

警察がくる事を、教えてくれたのだろうか。いや、それだって、本当かどうかは分からない。分からないが。

「お前さあ、名前は？」

「何故、名乗る必要が」

言いかけた男の言葉を遮って、智樹は口を開いた。

「俺は神坂だ。神坂智樹」

そんな智樹を見やり、男はすうつと目を細めた。そして、心底呆れたように言った。

「お前、バカか？」

「バカかって、失礼なヤツだな。なんで、初対面のヤツにそんな事、言われなきゃなんねーんだよ」

むつとしながら言った智樹に、男はこめかみを押さえた。

「なんだよ」

「お前、アンダーだつて言ったな」

「だから、そう言っただろ」

「アンダーが、軽々しく名乗るな」

そんな男の言葉に、智樹は「ああ」と呟いた。確かに、そう言われれば、そうだ。しかも、通り名だとか、そういうものならともかく、本名を名乗るのは不用意と言えば、不用意だ。

「そうか、そーいや、そーうだな」

「……」

付き合いきれないとでも言うように、深い溜息を一つ落とした男は、2、3歩の助走をつけた後、ひょいっと扉に飛び乗った。実に身軽な身のこなしに、つい見入ってしまった智樹は、その姿が、壁

の向こうに消えた後、はっと我に返った。

「あ、おい！ ちょっと待てよっ！」

言った智樹は、慌てて自分も塀の上に飛び乗った。だが、裏通りには、既に男の姿はなくなっていた。

「ったく、なんなんだよ、あいつはっ」

ブチッと呟いた智樹は、その視線をちらりつと正面玄関のほうに向けた。

赤い回転灯が、サイレンと共に近づいてくるのが見えて、智樹は慌てて塀から飛び降りた。

既に寝静まった商店街から、さらに一本奥に入った、ある意味分りにくい場所に、その店はあった。

古臭い煉瓦造りの、今時のカフェとは一線を画した、喫茶店。レトロと言えは聞こえはいいが、ただ単に、開業当時のままの姿を今に残しているだけの店だった。

とはいっても、看板に灯りがついての間は、常に客足が途絶えない。

立地条件は、お世辞にも良いとはいえないこんな場所にあるにしては、繁盛している方かもしれない。要するに、常連で成り立っているという話もあるが。

そんな店内にも、今は、客の姿はなかった。

もともと、八時には店じまいをするこの店が、日付が変わってしまったこの時間に、営業をしているはずもないのだが。

それでも、ダウンライトだけが灯されているカウンターにはまだ、人影があった。

「彰、遅いよね」

カウンターに突っ伏していた、女 紺野瑞希は机の上で波打っている、長い髪を弄りながら呟いた。そんな孫娘の言葉に、カウンターの奥でグラスを傾けていた、この店のマスターである鍵谷俊明は、その琥珀色の液体をなめながら掛け時計に視線を向けた。

一時十五分を回ったところだった。

彰 諏訪部彰が、ここを出て行ったのは、十二時半過ぎだったはずだ。まだ、四十分程度の話だ。

「まだ、出て行ってから、そう時間はたつとらんだらう?」

「そうかなあ。彰だったら、結構サクサク仕事終わらせるじゃない。今回の仕事、そんなに難しいものじゃなかったんでしょ? だった

ら、そんなに時間かかんないと思うけど」

言った瑞希に、鍵谷は苦い笑みを浮かべた。

確かに、仕事の難易度は、決して高くはなかった。だが、今回の仕事は、難易度が高くはなくても、手間は掛かる。そんな種類のものであった。

それに、現場までの移動には、バイクで十分強だと言っていた。それを考慮すれば、それほど時間が掛かっているわけではないだろう。それこそ、今戻って来るとすれば、現場での作業時間がほとんどないわけで。

そう、鍵谷がいう前に、瑞希は口を開いた。

「っていうより、最近、何かおかしいと思うのよね。この仕事も、わざわざ彰を指定してきてるわけでしょ？ そのわりには、依頼が簡単すぎるじゃない。本当なら、彰が出て行くような仕事じゃあないと思うんだけど」

「依頼に、簡単も難しいもないだろう」

たしなめるように言った鍵谷に、瑞希は不服そうに口を尖らせた。「でも」

「仕事を受けたのは、彰だ。不満があるなら、彰に言うんだな」

「おじいちゃん」

責めるような瑞希の口調に、鍵谷は小さく息をついて言った。

「まあ、奇妙は奇妙だがな」

確かに、ここ数件、ある意味妙な 彰の能力に見合わない仕事 が舞い込んで来ている事は確かだった。

彰のアンダーとしての腕は、若手のなかでもトップクラスだ。いや、若手などと言う区切りをつけなくても、トップクラスに間違いなかった。

今まで仕事をしくじった事は一度もなかったし、どんな難しい依頼であっても、正確にこなす彰の噂は、他のアンダーやコネクタの口にも上るようになっていた。

それがゆえに、ここ数年、彰のもとに入ってきていた依頼は、比

較的大きなヤマばかりだったのだ。

だからと言って、彰は仕事を選ぶような事はしない。それゆえに、ここ数件の依頼も、断わる事はしなかったが。

「なんだ。おじいちゃんのそう思ってるんじゃないの」

「だが、別に何の問題もないからなあ。今回の依頼にしても、仕事のわりには報酬は高かったわけだし。それに、仕事自体は簡単でも、手間はかなり掛かりそうな仕事だった事は確かだよ」

「だから、時間が掛かってるってどういうの？」

まだ納得がいかないと云うような瑞希に、鍵谷は深い溜息をついた。

「まったく。お前の彰鼻屑にも、困ったもんだな」

「別に、鼻屑なんてしてないわよ」

「他のアンダーの仕事には、それほど興味を持たないの？」

「……」

沈黙を返した瑞希に、鍵谷はくすりつと笑い声を漏らした。

瑞希に鍵谷の裏の仕事の存在を知られたのは、十年前だった。だが、その時には特に興味を持った様子もなかったというのに、五年前前だっただろうか。突然、この仕事に興味を持ち始めた。丁度、彰が頭角を現し始めた頃だ。同じ年頃の彰が鍵谷のもとに、それも、店の営業が終わった後、出入りをしていることを不審に思ったのがきっかけだったらしい。

本当は、こんなやくざな稼業になど興味を持って欲しくはなかったが、後の祭りだった。運の悪い事に、瑞希は情報屋としての能力を持ち合わせていたのだ。どうせ、言っても聞かないのならば、目の届く範囲に置いておく方が安全だ。そう判断した鍵谷は、瑞希が半ばこの仕事に足を突っ込んでいるのを黙認することにしたのだ。

「まあ、そのうち帰ってくるだろ」

「そのうち　ねえ」

口を尖らせながら言った瑞希は、カウンタに転がったまま溜息をついた。

丁度その時、からんつとドアに吊るされたベルが鳴って、瑞希はむくりつと身体を起した。
ついつとそちらに視線を向けると、件の彰が店に入ってくるころだった。

「おかえりなさい」

言った瑞希をちらりと見やった彰は、ヘルメットを脱ぐと「ああ」と短く答えた。そして、小さく息をつくと、ヘルメットをカウntaxにそれを置いた。

それを待っていたかのように、瑞希はすつと手を差し出しながら言った。

「戦利品」

そんな瑞希に、彰はくしゃりつと前髪を掻き上げると、肩を竦めながら言った。

「悪い。失敗した」

「ええっ？ 彰が失敗？ 嘘でしょ？ 一体どうしたのよ」

大きな目を丸くしながらまくし立てた瑞希に、彰は小さく息をつくと、無言のままカウntaxに腰を下ろした。

追い討ちを掛けるような瑞希の言葉に、彰は助けを求めるようについつと鍵谷を見やった。

鍵谷は無言のままグラスを下ろすと、彰の前にアイスコーヒーを置いた。

出されたグラスに口をつけた彰は、こくりつとそれを飲み込んだ。よく冷えたコーヒーが、ぞろぞろと胃まで流れていくのが分かった。グラスをカウンターに置いた彰は、小さく息をついた。

それを待つていたかのように、鍵谷が口を開いた。

「何があつた？」

そんな鍵谷をちらりと見やった彰は、ついつと天井を見上げた。何から説明したらよいものか。しばらく、考えていた彰は、乾いた唇をペろりつとなめてから口を開いた。

「他のアンダーと、鉢合わせた」

そんな彰の言葉に、鍵谷はぎよっとしたように目を見開いた。それこそ、彰が失敗したと言ったその言葉よりも驚いているようだった。

「なんだつて？」

「俺が現場に行った時には、ターゲットは、既にそいつの手の中にあつたよ」

「どついつ事だ？」

「さあ」

それは、彰自身が聞きたい事だった。

現場でアンダーと鉢合わせた事など、今までに一度もなかった。

しかも、あちらの言を信用するならば、ここ2回の彰の仕事は、あのアンダーとかぶつていたと言つ事になる。

「それは、俺の方が聞きたい」

言いながら鍵谷を見やった彰は、もう1度コーヒーに口をつけながら言った。

「おやじさん。今回の仕事、一体どついつツテで受けたんだ？」

「どついつといわれても　なあ」

「いや、今回だけじゃないな。ここんトコ、2回の仕事も、だ」

「何の話だ？」

全く話が見えないというように、鍵谷は首を捻った。

「鉢合わせた男が言うには、俺のココんとこ2回の獲物も、バツテイングしてたらしい」

そんな彰の言葉に、鍵谷は難しい表情を浮かべながら、ふむっと言った。そして、すっとグラスに手を伸ばした。

「どこのアンダーだ？ ずいぶん、おしゃべりだな」

「俺と同じ年ぐらいだったな。神坂 そうだ。神坂智樹、とか言っていた」

そんな彰の言葉に反応したのは、しばらく口を閉ざしていた瑞希だった。

「神坂？ ホントに神坂って言ったの？」

「ああ」

まさか、そんな反応をされると思っていなかった彰は、すうっと目を細めると瑞希を見やった。

「何か知ってるのか？ 瑞希」

「何かって言うほどのものじゃないけど……」

言葉を濁した瑞希は、ちらりつと鍵谷を見やった。

「本当に、神坂と言ったのか？」

確認するように言った鍵谷に、彰は首を傾げながらもこくりと頷いた。

「翔の息子 か」

小さく息をつきながら言った鍵谷に、彰はすうっと目を細めた。

神坂智樹と言う名前に聞き覚えはなかったが、翔と言う名前は、知っていた。

まだ、彰がこの仕事にかかわる前の話だから、話でだけしか聞いた事はないが、かなり腕のいいアンダーだったらしい。最後の最後まで、仕事を仕損じることのなかった、ある意味伝説のアンダーだ。

「翔？ 翔ってまさか、あの？」

「お前さんでも、しっとつたか？」

「噂で聞いたただけだ。ただ、彼は100%仕事をしくじらなかつた

って」

「ああ。その翔だよ」

こくりと頷いた鍵谷に、彰はただ「そうか」とつぶやいた。そして、少し考えた後、ゆっくりと口を開いた。

「同じ姓って事は、その関係者か？」

「お前さんと同じぐらいというのなら、翔の子供だろうな。そうかも、そんな年になったか。で、そのアンダーはどうした？」

「さあ。警察が動いていたし、嫌な予感がしたから、俺はすぐに引き上げたから」

「警察が動いていた？」

「ああ。前回と同じだ」

「そうか」

つぶやいた鍵谷は、一層難しい表情を浮かべた。

依頼が重なっていた上に、依頼を遂行する時には、必ず警察への通報がされている。こんなことが、そう、度々あるのははっきり言っておかしい。

「何かあるな」

「そうだろうな。あいつの言っていた事が本当なら、マズイ事になってるんじゃないか？」

「そう　だな」

言った鍵谷は、すうつと目を細めた。

その視線は、今このときを見てはいなかった。

しばらく、そうして考え込んでいた鍵谷は、ふと思いついたようにつぶやいた。

「まさか、二重契約　か？」

すいっと眉を寄せた鍵谷は、ボソリツと呟いた。

いつもどっしりと構えて、少しのことでは動じない鍵谷が、動揺しているように見えた。

「二重契約？」

彰が聞き返したが、鍵谷にはその声は聞こえていないようだった。

「いや、まさか、そんな事は」

先程、鍵谷は二重契約と言った。

それならば、確かに、依頼がバッティングしていても、おかしいことはない。だが、通常、コネクタに渡りをつける事自体が難しいのだ。特に、今回のような、違法行為となるような依頼の場合、わざわざ、そんなネタを複数のコネクタに話す事自体が、ありえない。それこそ、これがもっと、難しい案件であったなら。

そして、もっと、危険を伴うような依頼だったのなら、複数のコネクタにわたりを付けるのも領けるのだが。

「親父さん」

「ああ、いや。すまん。とりあえず、こんなことでは、仕事はさせられない。しばらくは休業だな」

言った鍵谷は、既にいつもの余裕を取り戻していた。

「そう、か」

二重契約があつたにしろ、アンダーには、あまり関係がない。

どちらかというと、コネクタの側の問題だ。ならば、彰がどうこう言う問題でもない。今回のように、アンダーが鉢合わせるとするのは、あまり良いことではないが、たとえ鉢合わせても、彰には何とかできる自信があつた。

だが、ターゲットを目の前で、もって行かれるのは。

「しかし、まさか、お前さんが先を越されるとは、な」

余裕を取り戻した鍵谷は、意地の悪い笑みを浮かべながら言った。そんな鍵谷に、彰は無表情のまま沈黙を返した。

今、それを言われたくはない。

別に、何かを失敗したわけではない。

ただ単に、仕事の取り掛かりが、あの神坂という男よりも、少しばかり遅かつただけだ。自分が、現場に先についていれば、間違はなく、ターゲットは自分が手にしていたはずだ。

そんな事を考えてしまう自分が、なんとも、嫌だった。

小さく息をついた彰を見やり、瑞希は珍しいもの見たというよう

に言った。

「やだ。彰、もしかして、機嫌悪い？」

「……」

「へえ。彰でも、そんな顔するんだ」

薄く笑みを浮かべながら言った瑞希に、彰は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

信号待ちの間に、ポケットの中にある、戦利品の存在を確かめた智樹はにやりつと笑った。

三度目にして、やっと出し抜いてやった。まさに、三度目の正直、と言うヤツだ。

日付が変わっても、気温はさほど下がってはいなかったが、依頼の成功はそんな暑さなど、忘れさせてくれた。額に浮かんだ汗さえも、今日に限っては全く気にならなかった。

昼間は常に渋滞している大通りも、今はほとんど車の姿もなかった。

信号が変わるのを待って、バイクを発進させた智樹は、事務所のビルへと向かっていた。多分、この時間なら、昂はまだ事務所にいるはずだ。

目的のビルをついっと見上げると、やはり、四階にはまだ皓々と電気がついていた。

ビルの前に、バイクを止めた智樹は、小さく息をつきながらグローブをはずした。そして、ヘルメットを取ると、つつつと伝った汗を、手の甲で拭う。少し、涼しくなったような気がした。

ついつと階段を見上げた智樹は、意気揚揚と四階まで駆け上がった。

そして、バンツとドアを開けると同時に叫んだ。

「昂！ 今度は勝ったぜ！」

ポケットから取り出した戦利品を、びしつと見せながら、得意げに言った智樹に、どうやら仕事をしていたらしい昂は、小さく息をつくと「ガキだな」と言った。

そんな昂の反応に、智樹は口を尖らせながら言った。

「なんだよっ。仕事成功して、何でそんな事言われなきゃいけない

んだよ」

「それが、ガキだって言うんだよ。そうそうお前が失敗するとは、俺も思ってたないし」

それは、もしかして、誉められたのだろうか。

いささか拍子抜けしたような気分になりながら、智樹は「あ、そう」と短く言った。そして、ソファに腰を降ろす。さすがに、昼間よりは冷房が効いているようで、クーラーから噴出されている風は、それなりに冷たかった。

「それより、警察が動いてたのを、知ってたか？」

言った昂に、智樹は思わず目を見開いた。

警察が現場に到着したのは、智樹が現場から引き上げる直前だった。現場から、ここまでバイクで十五分弱というところだ。その情報を、昂が既に持っていること自体驚きだった。

「ああ。丁度、引き上げる時に、来てたよ。引き上げるのが、あと五分遅かったら、ヤバかった」

「そうか。だけど、よく気がついたね」

言った昂に、智樹は些か居心地悪そうに身動きした。

自分で気がついたわけではない。あの時、あの男が警察が来ると教えてくれなかったら、智樹は何も考えずに、正面から出て行ったかもしれない。

それを考えると、薄ら寒かった。

「どうかしたのかい？」

些か神妙な顔をしていた智樹に、昂は首を傾げながら言った。

ちらりつと昂を見上げた智樹は、きゅつと唇をかんだ。あの男のことは、言わないわけには行かないだろう。

「警察の事は、あいつに聞いたんだよ」

「あいつ？」

訝しげに言った昂に、智樹は戦利品をテーブルの上に置きながら言った。

「ココントコ、俺の仕事搔っ攫ってたヤツだよ」

「まさか、鉢合わせたのか？」

「ああ。仕事が終わったあとだったけど、言った智樹に、昂は口元に手をやった。」

何か考えこむ時の、昂の癖だ。

「そう か」

何か考え込むようなことがあっただろうか。やはり、鉢合わせたことは、智樹が思っている以上に、重要なことなのだろうか。そんな事をぼんやりと思った智樹は、あの男の後姿を思い浮かべた。

「ってか、そいつが、すげー、嫌味なやつでさあ」

そんな智樹の言葉に、昂は口もとに薄く笑みを浮かべると言った。「まあ。アンダーやつてるくらいだからね。ろくな人間ではないだろうケド」

「あの一。俺も、そのアンダーなんですけど」

「だから、君も同類」

「 昂にだけは言われたくねーよな」

ボソリツと言った智樹に、昂はちらりっと冷たい視線を向けた。

そんな昂に、智樹は慌ててすっと視線を逸らした。

そんな智樹など、大して気にした様子もなく、昂は再度口を開いた。

「で？ その相手は？」

「俺と同じ年ぐらいのヤツだったよ。人形みてーな、きれーな顔してた」

「人形 ね。どうせなら、発信機ぐらい、付けとけばよかったじゃないか。そしたら、すぐ足がついたのに」

「あのかなあ 。 やっぱり、昂のほづが、よっぽどろくでもねーじやねーか」

ぶちつと言った智樹に、昂はにっこりと笑いながら、すくりつと立ち上がった。そして、智樹のほうにゆっくりと歩み寄ると口を開いた。

「そついう、生意気な事を言うのは、この口かな？」

にっこりと笑いながら言った昂に、智樹は慌てて自分の頬を押さえた。そう何度も、同じ手に引つかかるわけにはいかない。

そんな智樹を見やり、昂はくすりつと笑い声を漏らした。

「そんなに警戒しなくてもいいだろ」

「警戒しなきゃしないで、無防備だつって言うだろ」

「そんなの、当然だろう？」

すうつと目を細めた昂は、テーブルの上に置かれたメモリスティックを取り上げると、デスクに戻った。

そして、パソコンにそれを差し込むと、中のデータを確認した。

真剣に画面を見ている昂に、智樹はごくりつと息を飲んだ。

「どうだ？」

「ああ。問題ないよ」

「そっか」

ほつとしたように息をついた智樹は、続けて言った。

「目的のものと、他にもいくつかデータを抜いておいた。バックアップが取ってあるものに関しても、それは同じだ」

「そっか」

「まあ、次にパソコン立ち上げたら、今あるファイルを破壊して、あとはひたすらファイルを増殖させるウイルス仕込んでおいたから、まず、大丈夫だと思う」

「結構、エゲツナイ事するね」

にやりつと笑いながら言った昂に、智樹はふんつと鼻を鳴らした。この仕事自体が、そういう仕事ではないか。今更、エゲツナイと言われるのは心外だ。

「だけど、露骨にデータを盗みました、じゃまずいわけだろ。イロイロと」

「ああ。その通りだ」

どこか満足げに言った昂に、智樹はすうつと目を細めた。もしかして、試されたのだろうか。ふと、そんな事を思う。

そう、問いかけようとしたその時、電話機がけたたましい音を立

てて鳴り始めた。着信音の音量など、変えていないはずなのに、やたら大きく感じるのは、深夜だからだろうか。

ちらりとそちらに視線を向けた昂は、じっとそれを見つめていた。留守番電話に切り替わるのを待っているようだ。

こんな時間に、本業の客が電話を掛けて来るわけがない。

だが、コネクタとしての連絡先にも『高槻経営コンサルタント』の電話番号を使用していないわけで。となると、単なる間違い電話か、もしくは。

と、着信音が途切れて、留守電に切り替わった。

それと同時に、低い男の声が聞こえた。

『おるんだろ？ 昂』

そんな声に、昂は大きく深呼吸すると、電話をとった。

「おやじさんでしたか。お久しぶりです」

「どうやら、知り合いらしい。」

だが、こんな時間に、ここに電話を掛けてくるのは、些か不思議でもあった。

知り合いならば、携帯に掛けてくればいいわけで。そんな事を思っている、昂は気にした様子もなく、話し出した。

「ええ、元気ですよ。どうしたんですか？ こんな時間に。二重契約？ ずいぶん、耳が早いですね」

そんな昂の言葉に、智樹はギョツとしたように昂を見やった。

「ああ。もしかして。そうですね。じゃあやっぱり、アキラだつたんですね」

「アキラ？」

突然出てきた固有名詞に、智樹はすうっと眉を寄せた。

そんな智樹をちらりと見やった昂は、すっと背中を向けると笑いながら「それは、ある意味大金星ですね」と言った。

二重契約などと言う言葉が出ると言う事は、相手は同業者である可能性が高い。今このタイミングで、こんな電話が掛かってくるとすれば、先程の男のコネクタである可能性が高い。

「おい、昂」

電話中の昂に何を言っても無駄だと思いつつ、智樹は思わず口を開いた。

だが、やはり、その言葉は無視された。

小さく息をついた智樹は、口を尖らせながら、ソファーにふんぞり返った。聞きたい事が山ほどあるのに、このままでは、忘れてしまいそうだ。なかなか終わらない会話に、智樹は苛々しながら、電話が終わるのを待った。

しばらく智樹にはわからない会話をしていた昂は、ようやく、その会話を切り上げた。

「分かりました。はい、明日　いえ、もう今日ですね。少し、遅い時間にはなると思いますが、伺います」

言った昂に、智樹はギョツとしたようにカレンダーに視線を向けた。今日は、もう五日だ。

この日に、昂が予定を入れるなど、今までなかったことだった。

「　いえ。大丈夫です。かえって、おやじさんトコに行ってる方が、翔は喜ぶかもしれない」

そんな昂の言葉に、智樹はぴくりと反応した。

この電話の相手は、翔を　智樹の父親を知っているのか。

もちろん、コネクタであるのなら、アンダーであった父親を知っているもおかしくはない。

けれど　。

昂が、この日に予定を入れた事が、なんとなくシヨックだった。こんな事で、シヨックを受けるほうがおかしい。それは分かっ

いるのに、それでも、そう思ってしまった。

と、ごんつと頭の上に拳骨が落ちた。

「いてーっ!」

頭を押さえながら、ついつと上をむくと、そこには厳しい表情を浮かべた昂の姿があった。

「隙がありすぎるぞ」

「つて、別に、こんなトコで、気いはってる必要なんてないだろ!」

「今の話じゃないよ」

「へっ?」

「鉢合わせたアンダーに、名乗ったって?」

そんな昂の言葉に、智樹ははっと我に返った。

そういえば、そんなこともあった。そして、あの男に『迂闊に名乗るな』とも諭された。

「あ、いや。あの、な」

「相手がおやじさんとこのアンダーだったから、良かったようなもの」

「そういえば、アキラって言ったか?」

「ああ」

「もしかして、あの、アキラ?」

智樹の父親も、伝説とまで言われるアンダーだった。だが、最近、その翔にも劣らないと言われるアンダーがいる、という話を聞いた事があった。それが『アキラ』だ。

「そういう事。良かったね。仕事を搔つ攫われたのが、アキラなら、誰も、君が無能だとは言わないよ。しかも今回は、アキラの獲物を、君がとつたわけだし?」

そんな昂の言葉に、智樹は口を尖らせた。

「誰に取られようが、一緒だよ。っーか、アイツ、嫌いだ」

言った智樹に、昂はくすりつと笑い声を漏らした。

「だから、ガキだっていうんだよ。智樹は。もう少し大人になつたらどうだい?」

「うっせーっ。いけすかねーんだよっ」

思い出すだけで腹が立つ。

「まあ、いいや。とりあえず、今日はもう遅い。もうそろそろ、家に帰るよ」

「明日　　っていうか、今日、どうするんだ？」

「どうするって？　予定に変更はないよ」

「でも、さっき　　」

言いかけてやめた智樹に、昂はくすりつと笑った。

「おやじさんのトコに顔を出すのは、夜だよ。よければ、智樹も連れて行くよ？」

先程の会話を聞いている限り、電話の相手は、昂よりも一枚上手と言った感じだった。それに、あの『アキラ』のコネクタだという事は、もしかしたら、アキラがいるかもしれないのだ。

確かに、今回の獲物は、智樹が取りはしたが、なんとなくあいつには会いたくなかった。

「……遠慮しとく」

「そうかい？　まあ、そのほうがいいかもね。俺自身、おやじさんには、あれ以来あってないし」

言いながら、小さく息をついた昂に、智樹はすつと眉を寄せた。

あれ以来、というのは、翔が亡くなってから、だろうか。

「とりあえず、帰ろうか」

言った昂に、智樹はすくりつと立ち上がった。

「俺、バイクあるし、自分で帰る」

「そう、か。分かった。気をつけるんだよ」

「ああ。昂も、な」

言いながらヘルメットを手にとった智樹は、昂を振り帰る事もなく、事務所をあとにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2717n/>

Under Domain

2011年10月28日12時17分発行